

第2章 量的データから見る豊中市の 子どもの学びと育ち

比嘉 康則

とよなか都市創造研究所 研究員

<目次>

1. はじめに
2. 学力
3. 非認知能力
4. 体験
5. 健康
6. 保護者の働きかけ・意識
7. まとめ・考察

1. はじめに

本プロジェクトでは、「豊中市のすべての子どもの可能性・チャンスの最大化」を目的に据え、子どもたちの中の学びや育ちの面での格差の実際を明らかにするとともに、その格差の縮小に向けたヒントを探る分析を進めてきた。個別テーマに関する令和7年度（2025年度）の分析結果については、次章以降で詳細がまとめられる。

その導入として本章では、豊中市の児童生徒の学びと育ちの状況について、特に家庭の社会的背景（SES）による格差の実態に注目しながら、令和7年度（2025年度）の全国学力・学習状況調査データと子どもパネルデータから

わかることを記述的に概観する。家庭SESの指標について簡単に確認しておく（詳細は第1章を参照）、全国学力・学習状況調査データでは、家にある本の冊数（蔵書数）を指標とする。蔵書数が少ないほど、家庭SESが厳しいとみなすことができる。子どもパネルデータでは、生活保護・児童扶養手当・就学援助を受けているケースをSES1、それ以外のケースをSES2としている。

なお、本章では内容が煩雑になるため詳しい報告は省いているが、すべての分析結果について統計的な有意差の検定を行っている。以下で、高い、低い、差があるといった説明がされている内容は、すべて統計的な有意差（10%水準）が確認されたものである。

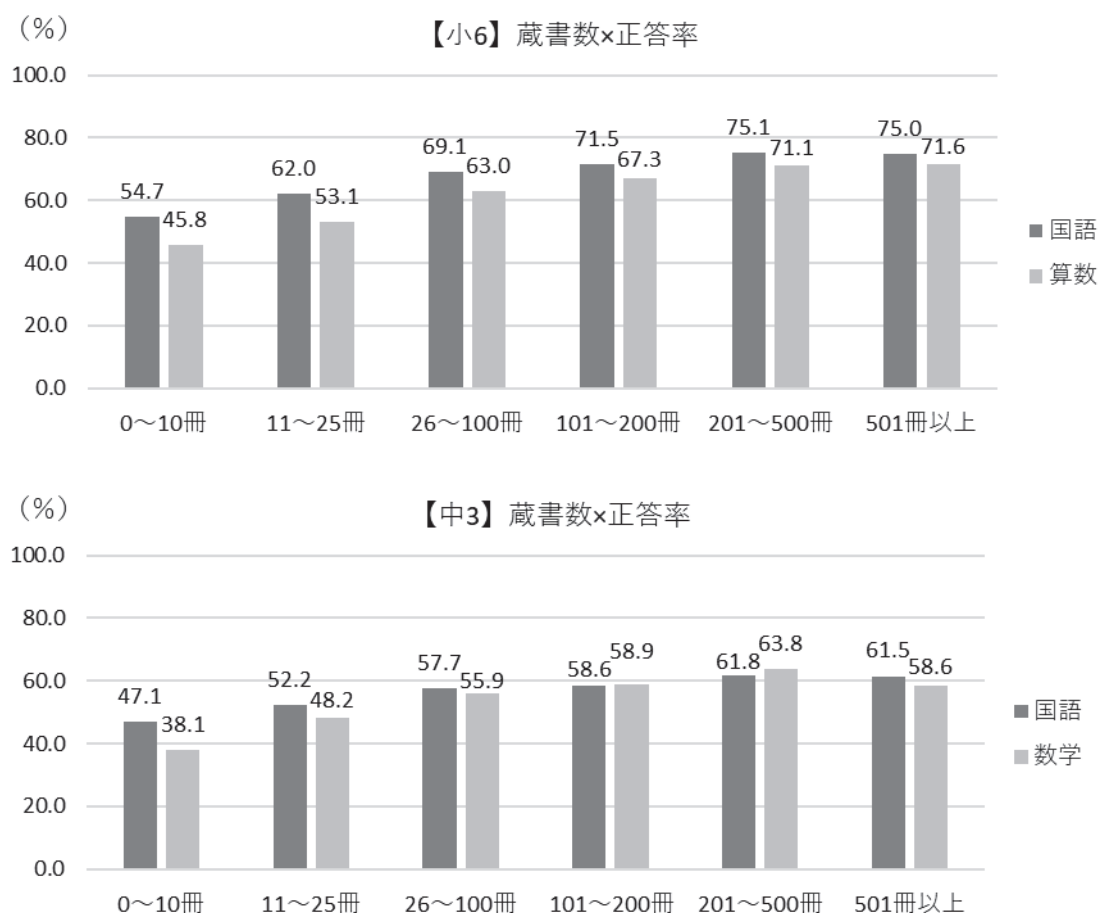
2. 学力

2-1. 教科正答率・授業理解度

まず、全国学力・学習状況調査データに基づき、教科正答率と家庭 SES の関係を確認しておきたい。結果は図表 2-1 である。蔵書数 501 冊以上で正答率が低くなる場合もあるものの、全体としては、家にある本の冊数が少ないほど、正答率が低い傾向が見られる。つまり、家庭 SES が厳しくなるほど正答率が低い傾向にある。

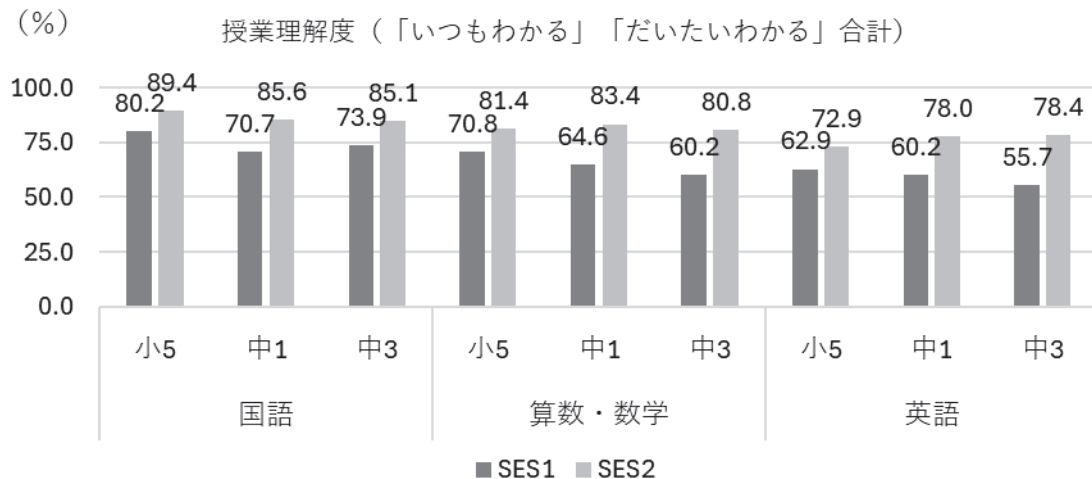
子どもパネルデータでも家庭 SES と学力の関係を確認しておきたい。子どもパネルデータ

では、学力の指標として授業理解度をたずねている。国語、算数・数学、英語の 3 教科の授業について、「いつもわかる」「だいたいわかる」「半分くらいわかる」「わからないことが多い」「ほとんどわからない」の 5 段階で聞いたものだ。このうち「いつもわかる」と「だいたいわかる」の合計を『授業がわかる』とし、その割合を学年別・家庭 SES 別に見た。結果が図表 2-2 である。いずれの教科・学年でも、『授業がわかる』割合は家庭 SES1 で低い傾向にある。SES 間の差は国語に比べ算数・数学と英語で大きく、この 2 教科では学年が上がるにつれ SES 間の差が広がっていく。



図表 2-1 家庭 SES×教科正答率

第2章 量的データから見る豊中市の子どもの学びと育ち



図表 2-2 家庭 SES×授業理解度

2-2. 学習時間・通塾

学習時間を見てみよう。全国学力・学習状況調査データでは、平日と休日の授業以外での学習時間（塾・家庭教師等を含む）がたずねられている。ここでは平日だけ見ておこう（休日も傾向は同じ）。結果を家庭SES別に集計すると、図表2-3のようになる。いずれの学年でも、家庭SESが厳しいケースほど学習時間が短い傾向が見られる。

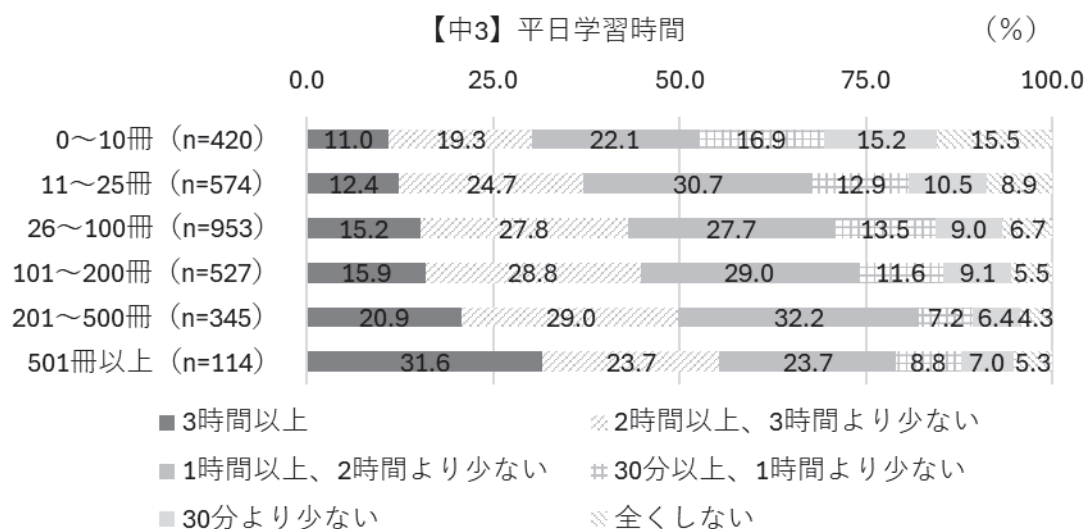
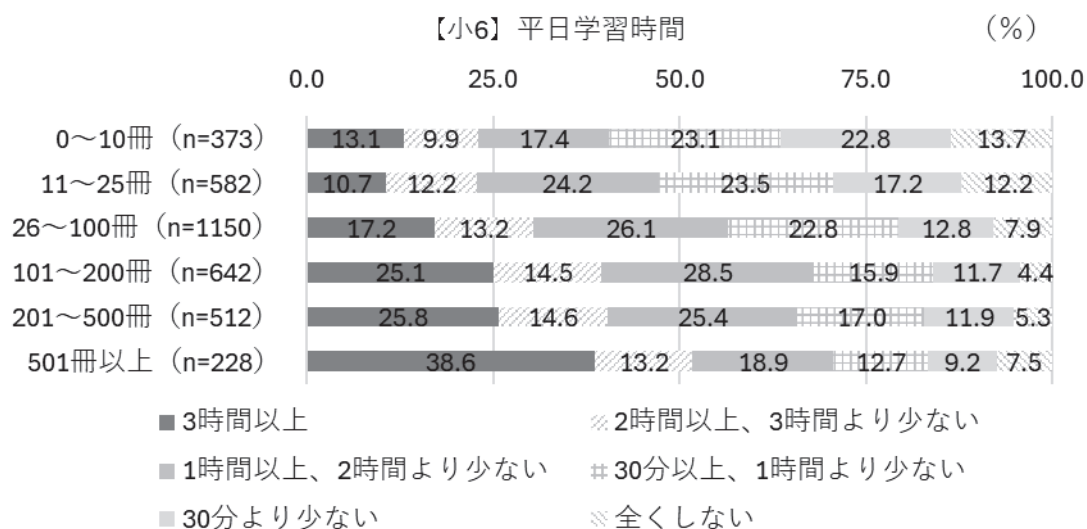
次に、通塾率である。全国学力・学習状況調

査では、通塾（家庭教師を含む）について、教わっている内容も含めてたずねている。この質問をもとに、通塾の状況を家庭SES別に見たのが図表2-4である¹。煩雑さを避けるため蔵書数を3つのカテゴリにまとめている。これを見ると、いずれの学年でも家庭SESが厳しくなるほど非通塾の割合が高くなることがわかる。また、通塾しているケースでも、家庭SESにゆとりがあるほど「発展的内容」を塾で習っている割合が高い。

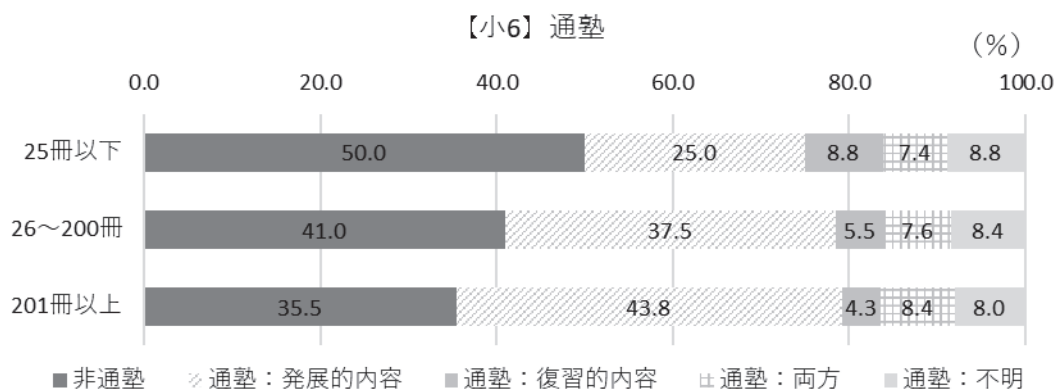
¹ 選択肢は「1 教わっていない」「2 学校の勉強より進んだ内容や、難しい内容を教わっている」「3 学校の勉強でよく分からなかった内容を教わっている」「4 上記2、3の両方の内容を教わっている」「5 上記2、3の内容のどちらと

もいえない」の5つである。グラフでは、選択肢1を「非通塾」、2を「通塾：発展的内容」、3を「通塾：復習的内容」、4を「通塾：両方」、5を「通塾：不明」とした。

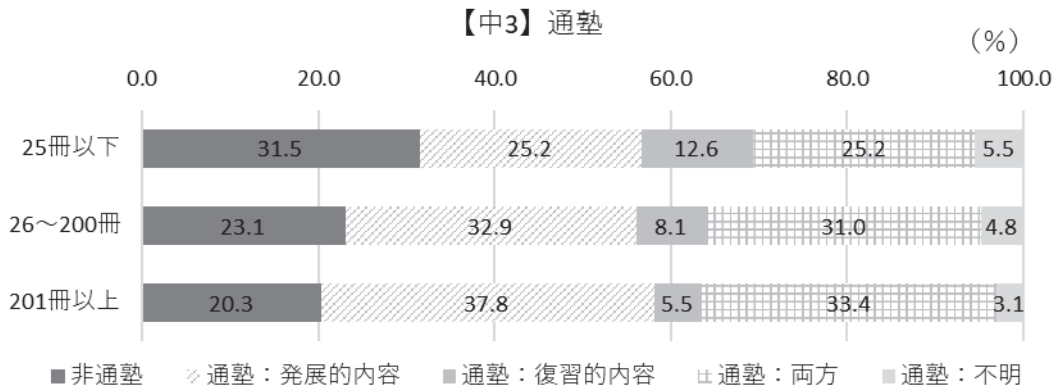
調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究Ⅲ



図表 2-3 家庭 SES×学習時間



第2章 量的データから見る豊中市の子どもの学びと育ち



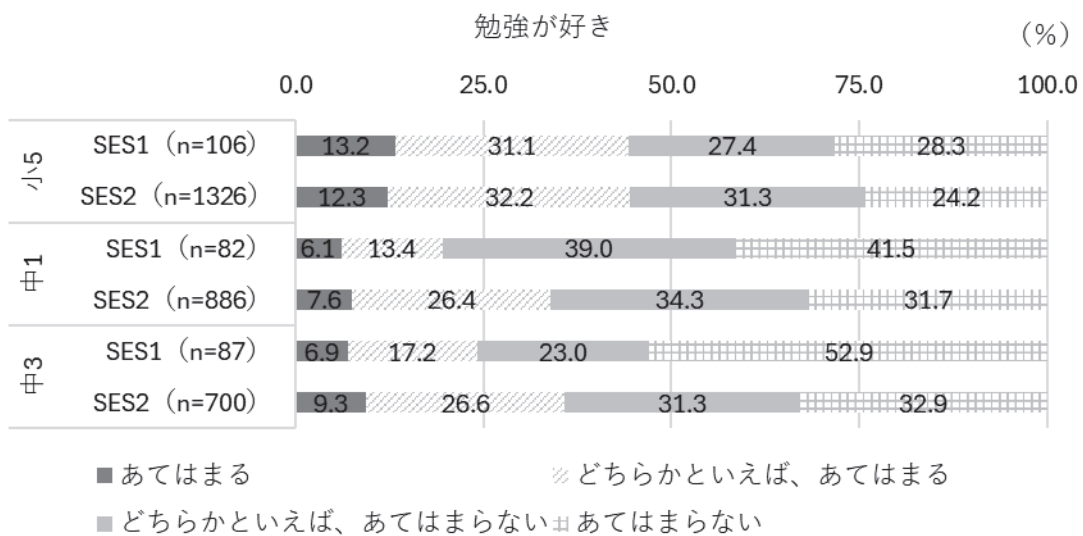
図表 2-4 家庭 SES×通塾

2-3. 学習意欲

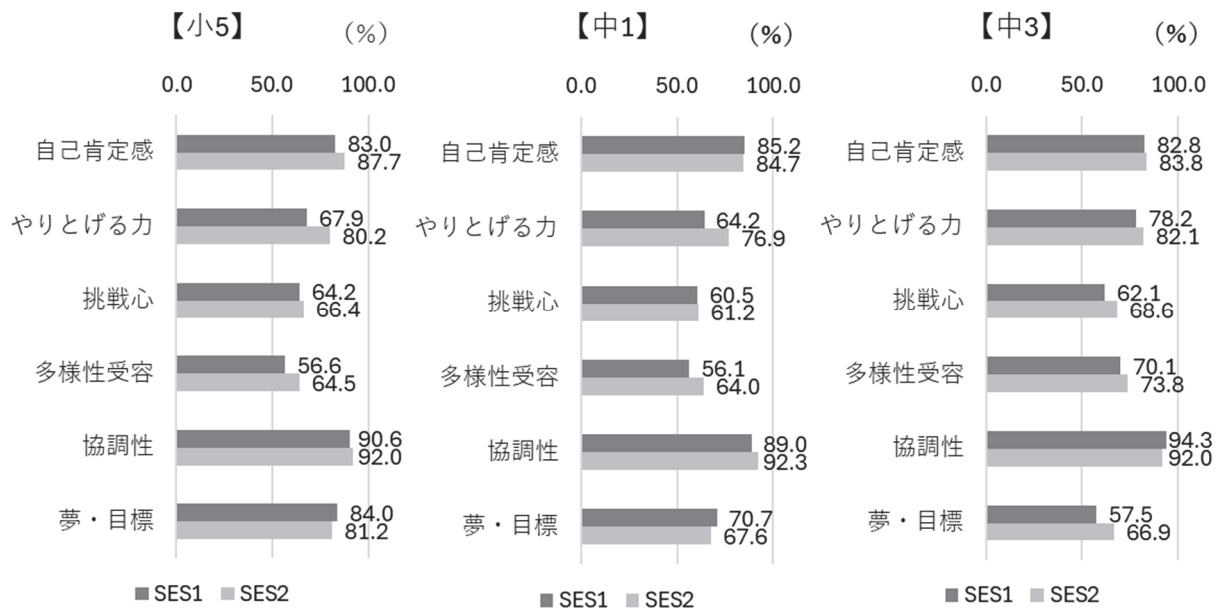
続けて、子どもパネルデータに基づき、学習意欲を確認する。調査票では「勉強がとても好きだ」「勉強しようという気持ちがわからない」について、「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」「どちらかといえば、あてはまらない」「あてはまらない」の4つから1つを選んでもらった。

学年別・SES別の結果が図表 2-5 である。

まず、「勉強が好き」については、小5ではSES間の差がほほないものの、中1・中3ではSES2にくらべSES1で「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」の割合が低いことがわかる。また、「勉強しようという気持ちがわからない」については、特に中1で家庭SES間の差が見られ、SES2にくらべSES1で「あてはまる」の割合が高い。特に中学生で、学習意欲の格差が見られることがわかる。



第2章 量的データから見る豊中市の子どもの学びと育ち



図表 2-6 家庭 SES×非認知能力

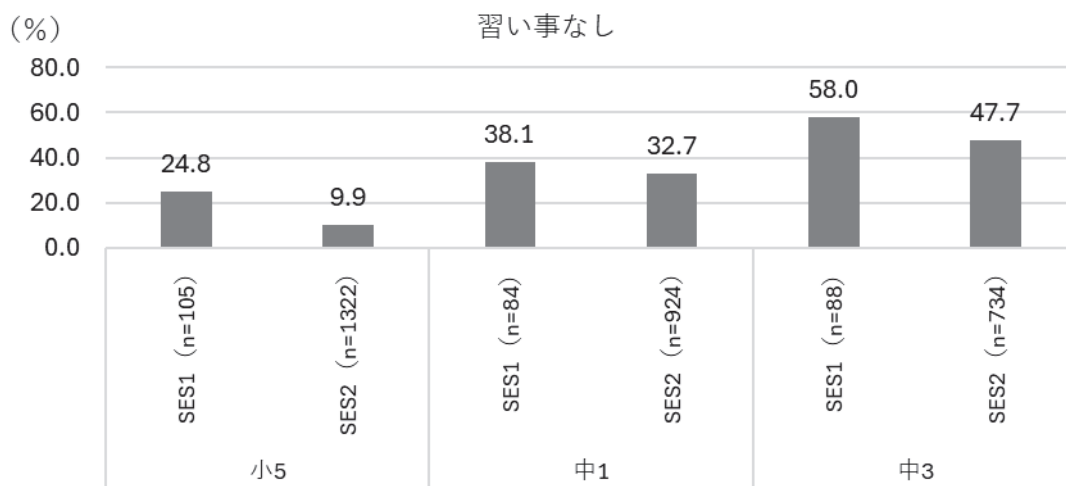
4. 体験

4-1. 習い事

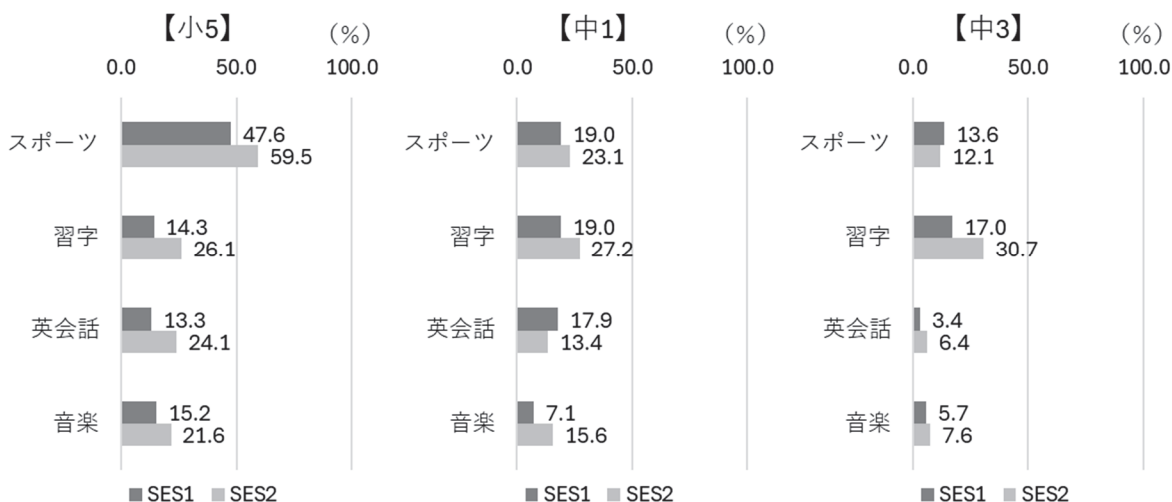
続けて、習い事について見てみよう。子どもパネルデータでは保護者に対し子どもがやっている習い事をたずねている。選択肢は「学習塾(家庭教師を含む)」「音楽」「習字」「そろばん」「スポーツ」「英会話など語学教室」「絵画などの芸術」「バレエ・ダンス」「その他」「何もしていない」である。ここではまず、「学習塾」以外の選択肢を1つも選んでいないケースを『習い事なし』とし、その割合を家庭SES別に見てみる。結果は図表2-7である。小5・中3

で明確な差が見られ、家庭SES1で『習い事なし』の割合が高い。

全体の選択率が高い習い事として、ここでは「スポーツ」(35.8%)、「習字」(26.7%)、「英会話」(15.9%)、「音楽」(15.7%)の4つについて、家庭SES別の集計を見てみよう。結果は図表2-8である。明確な差が見られるのは、小5の「スポーツ」「習字」「英会話」、中1の「音楽」、中3の「習字」である。いずれもSES2のほうがSES1よりも選択率が高い。習い事を通じた体験には、家庭SESによる差が見られるといえる。



図表 2-7 家庭 SES×習い事



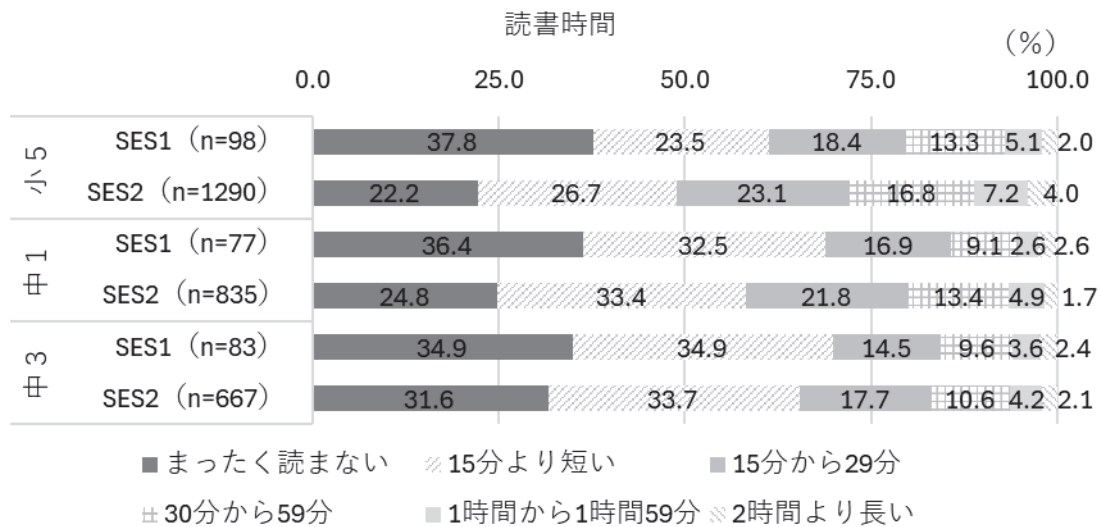
図表 2-8 家庭 SES×習い事

4-2. 読書

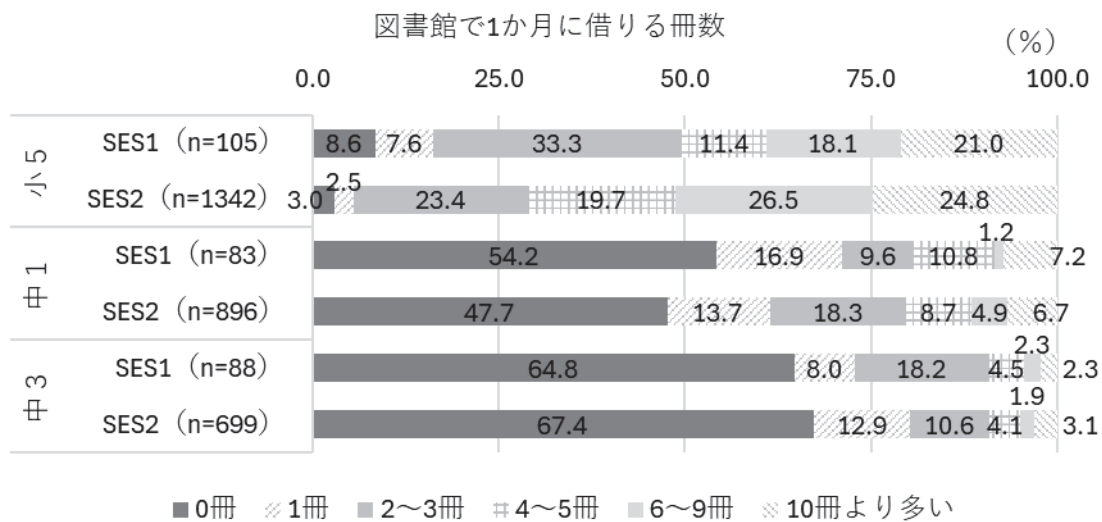
次に、子どもパネルデータに基づき読書関連の結果を確認する。平日の1日あたりの読書時間と家庭SESの関係が図表2-9である。明確な差が見られるのが小5で、SES2で読書時間が長い傾向にある。図書館で1か月に借りる冊

数と家庭SESの関係が図表2-10である。やはり小5で明確な差が見られ、家庭SES2のほうに借りる本の冊数が多い傾向にある。少なくとも小学生の間は、読書関係の習慣に家庭SESによる差が見られる。

第2章 量的データから見る豊中市の子どもの学びと育ち



図表 2-9 家庭 SES×読書時間



図表 2-10 家庭 SES×図書館利用

5. 健康

子どもパネルデータでは、子どもの健康に関して「自分の体や気持ちで気になること」をたずねている。選択肢は「眠れない」「よく頭が痛くなる」「歯が痛い」「不安な気持ちになる」「ものを見づらい」「聞こえにくい」「よくおなか痛くなる」「よくかぜをひく」「よくかゆくなる」「まわりが気になる」「やる気が起きない」

「イライラする」「その他」「気になることはない」である。

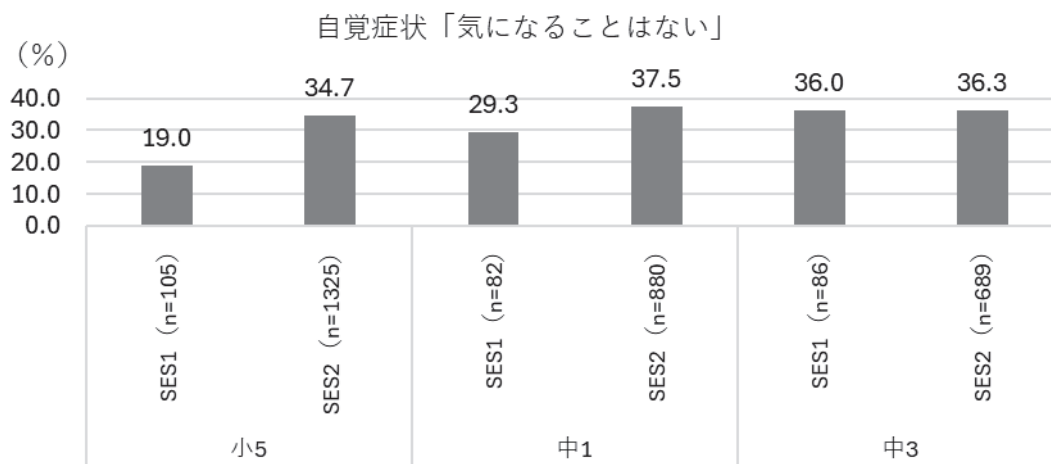
まず、「気になることはない」を選択したケースを家庭SES別に見たものが図表2-11である。明確な差が見られるのは小5で、SES1のほうが「気になることはない」割合が低い。つまり、SES1のほうが何らかの自覚症状を有している割合が高い。

自覚症状の数を、身体的症状・精神的症状に

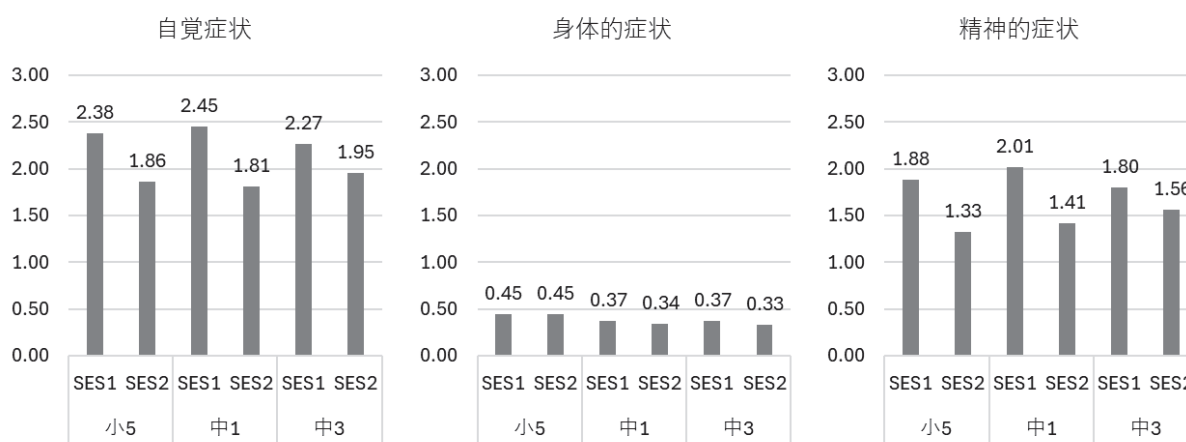
調査研究報告 豊中市の子どもの学びと育ちに関する総合的な調査研究Ⅲ

も分けながら、家庭 SES 別に集計した結果が図表 2-12 である²。自覚症状全体では、SES 間の明確な差が見られるのは小5と中1であり、SES1 のほうが自覚症状が多い。身体的症状に

ついては、家庭 SES による差は見られない。精神的症状については、小5と中1で明確な差が見られる。



図表 2-11 家庭 SES×自覚症状なし



図表 2-12 家庭 SES×自覚症状数

6. 保護者の働きかけ・意識

6-1. 働きかけ

子どもパネルデータでは、保護者に対するア

ンケートのなかで子育て・教育に関する意識や行動についてたずねている。まず、子どもへの働きかけに関する質問のうち、SES 間の差が確認される項目をまとめた結果が図表 2-13 で

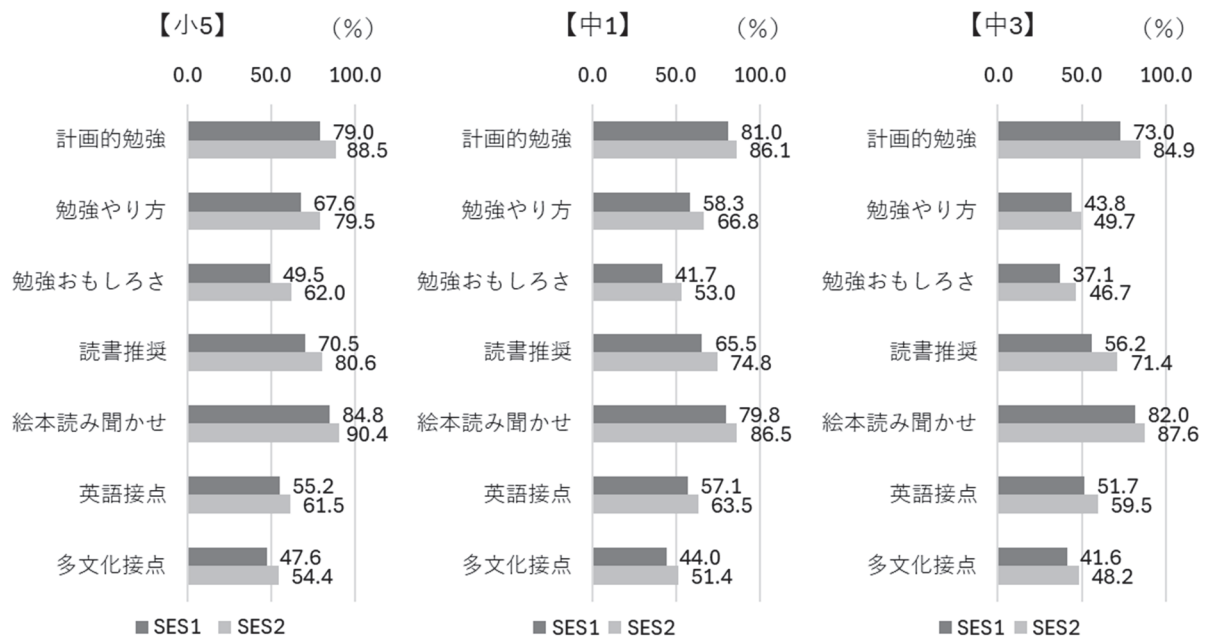
² 身体的症状は「歯が痛い」「ものを見づらい」「聞こえにくい」「よくかぜをひく」「よくかゆくなる」の5項目。精神的症状は「眠れない」「よく頭が痛くなる」「不安な気持ちになる」の7項目。

「よくおなかが痛くなる」「まわりが気になる」「やる気が起きない」「イライラする」の7項目。

第2章 量的データから見る豊中市の子どもの学びと育ち

ある³。いずれの項目も、SES2のほうが子どもに働きかける傾向にあった。「計画的勉強」（計画的に勉強するようお子さんに促している）は小5・中3、「勉強やり方」（勉強のやり方を教える）は小5・中1、「勉強おもしろさ」（勉強のおもしろさを伝える）は全学年、「読書推奨」（子どもに本を読むようにすすめている）

は全学年、「絵本読み聞かせ」（子どもが小さいころ、絵本の読み聞かせをした）は小5・中3、「英語接点」（子どもが英語に触れるよう意識している）は小5・中3、「多文化接点」（子どもがさまざまな国の文化に触れるよう意識している）は中1・中3で明確な差が見られた。



図表 2-13 家庭 SES×保護者の働きかけ

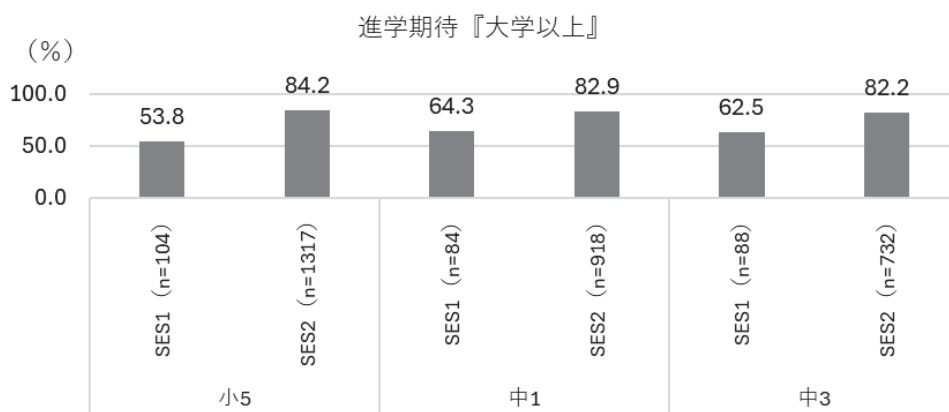
6-2. 進学期待

子どもパネルデータに基づき、保護者の進学期待をSES別に見てみよう。大学以上の進学を期待する割合の集計結果が、図表2-14である⁴。いずれの学年でも、SES1よりSES2のほうが大学以上の進学を子どもに期待する傾向にある。

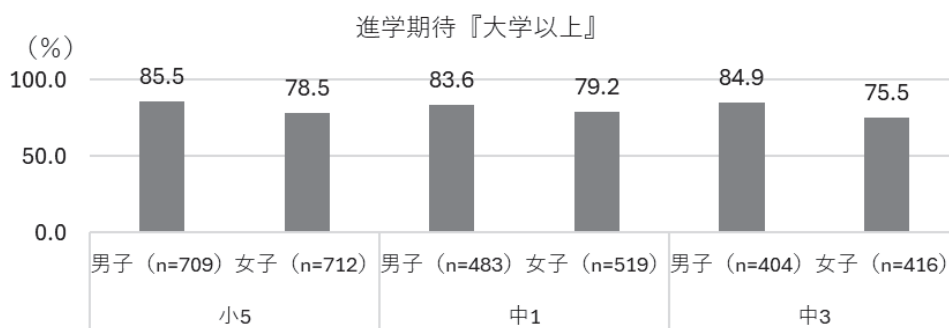
なお、家庭SESではなく子どもの性別に基づき、保護者の進学期待を集計した結果が図表2-15である。いずれの学年でも、女子よりも男子であるほうが保護者は大学以上の進学を期待する傾向にある。子育てに関するジェンダーギャップがうかがえる。

³ 各項目について、調査票では「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」「どちらかといえば、あてはまらない」「あてはまらない」の4件法でたずねている。図表では情報の簡略化のため、「あてはまる」「どちらかといえば、あてはまる」を合計した『あてはまる』の割合を示している。

⁴ 調査票の選択肢は「中学校まで」「高校まで」「専門学校・各種学校まで」「短期大学・高等専門学校まで」「大学まで」「大学院まで」「その他」「わからない」である。ここでは情報の簡略化のため、「大学まで」「大学院まで」を合わせた『大学以上』の割合を見る。



図表 2-14 家庭 SES×保護者の進学期待



図表 2-15 子どもの性別×保護者の進学期待

7. まとめ・考察

本章では、令和7年度（2025年度）の全国学力・学習状況調査データと子どもパネルデータからわかる豊中市の子どもの学びと育ちの状況について、家庭SESによる格差に焦点をあてながら分析してきた。児童生徒の学力、学習時間、通塾、学習意欲、非認知能力、習い事、読書、健康、保護者の働きかけや意識といった面で、SES間の差が確認された。

子どもの学びと育ちをめぐる格差は、複合的に関連しあっていると考えられる。たとえば、非認知能力は学力と関連している可能性が高い。また、通塾や塾で教わっている内容の差は、学習時間や教科正答率、授業理解度の差をもたらしているだろう。学業面での不振は、精神的

な健康につながっている可能性もある。また、保護者の教育面での働きかけや進学期待は子どもの学力や非認知能力に関連し、逆に子どもの学力や非認知能力が保護者の働きかけや進学期待に影響することもあり得る。

子どもの学びと育ちに関する諸側面は、複合的に関連しあっていると考えられる。だからこそ、子どもの学びと育ちを支えるためには、複数の分野を横断した総合的なアプローチが必要とされる。そして、家庭SESは、そのような諸関連の基底にある要因のひとつとして理解される必要がある。

次章以降では、いくつかのテーマに関してこのような諸要素の絡まり合いを解きほぐしながら、家庭SESの格差の縮小に向けたヒントを探ることにしたい。